

平成25年度前期における アクティブ・ラーニングの活動成果と今後の課題

下田 真也

1. はじめに

PBL (Project/Problem Based Learning) や学生参加型の授業形態の総称でもある「アクティブ・ラーニング」が、本学経済学部でも新規科目として平成25年度から開講されることになった。文部科学省の中央教育審議会大学分科会大学教育部会の審議 (平成24年3月) においても、「課題解決型の能動的学修」との訳語を付して「アクティブ・ラーニング」の重要性が述べられており、近年関心が高まっているテーマの一つである。

そもそもアクティブ・ラーニングは多様な授業形態を含む概念であり、河合塾(2011, 2013)の中で紹介されている京都大学溝上准教授によれば、「学生参加型授業」・「共同学習を取り入れた授業」・「各種の学習形態を取り入れた授業」・「PBLを取り入れた授業」・「その他」に分類されるとのことである。実際前掲報告書によれば、産業能率大学経営学部や武蔵大学経済学部、長崎大学経済学部など、既に少なくない数の大学・学部で様々な授業形態のアクティブ・ラーニングが導入され成果を上げていることが示されている。また、筆者が平成25年10月に参加した「2013年度第1回河合塾FDセミナー 教員の協働を促すアクティブラーニング 学びの質保証をいかに実現するか」においても、名古屋学院大学経済学部・立命館大学国際関係学部・立教

大学経営学部からそれぞれ PBL や学生参加形態のアクティブ・ラーニングの取り組み事例が紹介され、活発な意見交換が行われていた。

そこで本稿では、このような状況を背景に本学経済学部においても新規科目として導入されることとなった「アクティブ・ラーニング」について、「学生主体の授業」という大枠の中で具体的にどのような形で授業の構築・運営がなされて、どのような成果を課題が出てきたのかを整理分析し、まとめていくことを試みたいと思う。なお、経済学部における「アクティブ・ラーニング」は前後期共に開講しているが、執筆のタイミング上、対象を前期に絞った内容となっていることをお断り申し上げておく。

2. 本科目と受講者の概要

先に述べたように、本来「アクティブ・ラーニング」とは学生が自主的・能動的に学修に参加する学びの方法を指す言葉であり、学生の主体性を最大限尊重することが望ましい科目の在り方であると思われる。しかしながら、一方で本科目は今年度が初めての取り組みということもあって、完全に白紙の状態から学生が企画を立ち上げることが難しい可能性も考えられたため、事前にある程度の活動計画を準備しておくこととした。具体的には、履修仮登録の段階で数十名規模の履修者数が確保できるところが確実となり、多少人手がかかる施策であっても可能だと判断したため、教員側で「前期末（7月28日(日)）に開催される本学のオープンキャンパスにおける学部のPR活動」を計画し、学生側から「ぜひとも行いたい」という企画案が出ないようであれば、この用意した施策を提案するつもりでいた。

また、今年度前期における本科目は、月曜日の3限と5限に開講された。受講の本登録を行った学生は3限クラスが50名、5限クラスが11名の計61名であり、その内訳は表1のとおりである。

表1 受講者の内訳

	男	女
1年次生	23	1
2年次生	13	0
3年次生	13	4
4年次生	6	1
計	55	6

結果的に、3限クラスで4名、5限クラスで1名の出席不良者が出たため、実質的な施策参加者は56名ということになった。

3. 活動状況

本節では、講義期間中における各グループの具体的な活動状況を、時系列に沿ってまとめていきたい。

(1) 活動前半(4月～5月)

1回目の講義では、本科目が新規の科目で、また履修仮登録期間でもあったため、まず「講義の目的・内容」等の説明を十分に行った。特に、「学生主体で企画・運営を行っていくことを目指す」点を強調して伝えた。この際同時に、受講者全員を対象に、「①『アクティブ・ラーニング』としてやってみたいこと(可能性の有無は問わない)」・「②自分のセールスポイント」・「③九州産業大学の魅力」について自由記述のアンケートを行った。これは、本講義開始前の時点で学生が「アクティブ・ラーニング」という科目や、自分自身さらには九州産業大学と経済学部をどのように捉えているのかを知るために行ったものである。アンケートの詳細な結果については省略するが、①の問いに対しては「オープンキャンパスや香椎祭での活動」・「ボランティア活動」・「学内外との交流イベント」という回答が多くみられた。②の問いに対する回答は多岐にわたったが、「体を動かすこと」・「他人とのコミュニケーション」・「積極性」に類するものが相対的に多くあった。③の問いに対しては、「学内設備の充実度の高さ」・「学生数の多さ」が多く回答されてい

た。

このアンケートの結果と正式な履修登録者数を勘案した結果、全体的な施策としては「オープンキャンパスにおける学部PR」を行い、学生を各10名程度のグループに分けた上で各グループに自由にPR企画を検討させることとした。またグループ分けについては、3限目クラスは10人ずつの5グループに（以下、A～Eグループ）、5限目クラスは履修者11名全体で1グループ（以下、Fグループ）とした。なおA～Eグループについては、各学年の学生がそれぞれのグループに等分されるよう担当教員側でグループ分けを行っている。

2回目の講義では全体施策（オープンキャンパスでのPR）とグループ分けを学生に伝えるとともに、グループ内での自己紹介とグループ名・リーダー・サブリーダーの決定、オープンキャンパスで行いたい施策の話し合いを行わせた。リーダーとサブリーダーについてはどのグループもある程度スムーズに話し合いが進み、リーダーにはいずれも男子の4年次生が3名、3年次生が2名、2年次生が1名選出された。また、サブリーダーは3年次の男子学生が2名と女子学生が1名、2年次の男子学生が2名と1年次の男子学生が1名選出された。

一方で、行いたい施策についてはどのグループも時間内に結論が出なかったため、3回目の講義に持ち越し、ひとまずこの段階では表2のとおり決定した。

表2 各グループのオープンキャンパスでの施策内容（当初計画）

グループ	施策内容
A	九州産業大学と経済学部の紹介CMを作成
B	サークルと大学近隣飲食店の紹介チラシの作成
C	クイズを使った経済学部の紹介
D	九州産業大学の紹介を兼ねたアンケートの実施
E	学内スタンプラリー
F	学内ウォークラリー

4回目の講義時間になると、グループの施策計画内容もより具体化してくるようになり、グループによっては細かい役割分担の決定等も行っていった。またC～Fのグループからは、施策に参加した来場者へ駄菓子や飲み物等の

粗品を提供したいとの希望が出されたので、検討した結果予算を措置することとした。さらにFグループでは、アクティブ・ラーニング活動で統一して使用するポロシャツと学部名を入れた幟の作成が提案され、色・形等の基本部分をグループで話し合った後、デザインを得意とする学生が詳細な下絵を作成していた。

(2) 活動後半（6月～7月）

この時期になってくると、グループによって活動や話し合いの活発さ・計画の進捗状況等に差が見られるようになってきたので、より具体的な施策内容を話し合わせるとともに、オープンキャンパス当日までのスケジュール表を作成させた。また、部外発注が必要となるチラシの作成や粗品の購入について早期の対応を促した。しかしながら、当日の活動シミュレーションができるグループもあれば、リーダー自身も施策の明確なビジョン・方向性を説明できないグループも出てくるなど、グループ間の差はなかなか縮まらない状況となってきた。

担当教員からある程度の助言も行った結果、この段階で具体化できた施策内容が表3に取りまとめているが、最終的には全グループがこの内容での施策を行うこととなった。より詳しい施策内容は、「(3)オープンキャンパス当日」で後述する。

表3 各グループのオープンキャンパスでの施策内容（最終）

グループ	施策内容
A	九州産業大学の学内紹介スライドの作成
B	サークルと大学近隣飲食店の紹介チラシの作成
C	クイズを使った経済学部への紹介と参加者への粗品進呈
D	アンケートを使った経済学部への紹介と回答者への粗品進呈
E	学内スタンプラリー（3か所）と参加者への粗品進呈
F	学内ウォークラリー（5か所）と参加者への粗品進呈

施策に伴う必要備品・消耗品等のリストアップや、当日の役割分担と大まかな時間配分について6月中の作成を指示した結果、グループBからFまではリーダーと何度かやりとりを行うことで一応形あるものがまとまってきた。一方でグループAからは明確な報告が十分には行われず、リーダー以外のメ

ンバーにも照会を行うようなことが何度かあった。

オープンキャンパス直前は、各グループが施策の最終的なチェック等を行う一方で、チラシや粗品等の外注品の校正・納品・買い出しが重なり、正課時間外にリーダーを呼び出したり、グループ独自に活動を行うようなこともあった。



図1 グループ活動時の作業の様子

また、オープンキャンパス当日には半日以上の活動を行うため2回分の講義時間を充てることとしていたが、日曜日にあたっていることもあって当日の欠席を申し出る学生がこの時期に何人か出てきた。そのため、改めて当日の出席予定をリーダーに確認させたところ、この時点で5名程度の欠席予定が出ていた（なお当日の実際の欠席者数は、講義期間中の出席不良者も含め9名となった）。

(3) オープンキャンパス当日

当日受講者には8時15分の集合を指示した。オープンキャンパスの受付開始である9時まで45分の準備時間を見込んでいたが、活動拠点となるテントの設営に時間が必要となった一方で遅刻者もあり、準備には十分な時間ではなかったと考えている。なお活動拠点のテントは2号館前広場に立てることとなったが、経営学部のテントと共に賑やかな雰囲気を出せたのではないかと思っている。



図2 2号館前広場の遠景（奥にあるのが経済学部テント）

担当教員として各グループの施策状況を随時確認してみた結果をまとめてみると、おおよそ以下のような内容となった。

グループA

学内紹介のスライドをプロジェクターで上映していたが、ナレーションや説明文が不足していた上に、テント内とはいえ強い日差しがあるため映像が目立たず、残念ながら来場者へのインパクトは不十分だったようである。しかしながら、スライド自体は学内の様子を自分たちで撮影した写真を使ったもので、しっかりと作成してあったと思われる。

グループB

学内のサークル4つと近隣の飲食店3店舗を紹介した、A3サイズのチラシの配布を行った。準備枚数が1,000枚と多量であったものの、事前にしっかり取材を行った十分な内容のチラシであり、北門付近等2号館周辺以外でもリーダーを先頭に積極的な配布を行って大半を配り終えたようであった。

グループC

ホワイトボードを使ってテント前でクイズを行い、参加者に粗品として下敷きを配付する施策を行った。大学や経済学部になんだクイズで問題

内容は工夫もされていたが、実施時間を確定していなかったことや屋外で声が通りにくい状況であったせいもあって、集客に多少苦勞していたようである。

グループD

大学と経済学部に関するアンケートを配付し、回答をテントに持参したら飲み物（ペットボトル）と駄菓子を進呈する施策を行った。アンケート回答というわかりやすさからか、当初500枚用意したアンケート用紙がすぐに不足し、午後から追加でアンケート用紙を印刷することになるくらい集客には成功していた。また、グループリーダーが自費で購入したゲームキャラクターのコスチュームを着込んで集客にあたっていたことも、大きく奏功したと思われる。

グループE

学内3か所に机を設置しスタンプラリーを行い、参加者に氷菓と駄菓子を進呈する施策を行った。スタンプをグループで自作したり氷菓の保存を学食に依頼するなど、準備段階からしっかりとした対応を行っていたこともあり、100部用意したスタンプラリー台紙は全て配付でき、集客も十分に行っていたようである。

グループF

午前と午後に1回ずつ来場者を引率して学内巡り(5か所)を行うウォークラリーを実施し、参加者に飲み物（ペットボトル）と粗品（汗ふきシート）を提供する施策を行った。時間・集合場所を明示していた施策周知チラシがわかりやすかったこともあり、午前・午後とも十分な集客があったし、学内施設を学生が説明することで、高校生にも親近感を持ってもらえたようである。



図3 ウォークラリーの様子

4．主な活動成果

本科目では、活動成果を図るために学生の成績評価を兼ねて期末にレポートを課したが、グループリーダーとグループメンバーで内容を変えたものを用意した。メンバーには、「準備段階や施策当日における振り返りや反省事項、来年度以降の施策への提言」等の内容のレポートとしたが、リーダーにはそれらに加え「メンバーの評価（5段階評価・評価の理由も記入）」も行うような内容とした。

提出されたレポートについて概要については、以下とおりである。

まずリーダーのレポートについては、当初課題を出した際には学生同士での評価であるので、甘い評価が出されてくることを懸念していたが、どのリーダーも客観的に納得のいく理由でメンバーの評価に差をつけており、活動状況をしっかりと把握していたことがうかがえた。特に出席状況が悪い学生やグループ活動に消極的な学生にはどのリーダーもそれを理由とした低い点数を付けている等、どの学生に対しても担当教員がおおよそ予想していた評価とほとんど差が無い点数が付されていたことが印象的であった。また反省事項としては、グループをまとめる難しさを複数のリーダーが記述していた。

次にメンバーのレポートの特徴については、まず文章量の個人差が大きかったことあげられる。これは、明らかに活動への取り組み度合いが影響していると思われる。さらに詳しく記述内容を見てみると、次のような傾向が

見て取れた。

- ・ 事前準備については、「取り組みの遅れ」や「学生相互の連携協力の不足」を反省する記述が多かった。
- ・ 当日の活動については、「自分のグループ施策には積極的に関わられた」、「来場者に経済学部のことをPRできた」とする記述が多かった一方で、「来場者からのイレギュラーな質問（他学部の施策や場所等）に対して十分に対応できなかった」という反省が比較的多かった
- ・ 総合的な感想としては、特に1年次生から「大学生らしい活動ができた」という記述が出されていたし、どの学年でも「来年度もぜひ行いたい」という記述が多くみられた。また、次年度以降への提言として、大学・学部との連携強化や地域貢献への活動拡大等が出されていた

これらのレポートからは、本科目の活動を通じて、リーダーを務めた学生にはグループ運営の難しさを経験することでリーダーシップをある程度は醸成することができたと考えられる一方、それ以外の学生に対しても、学生が主体的に動く機会を持つことで主体性や行動力を多少なりとも育成することができたことが成果として得られていることがうかがえる。

また担当教員の立場からは、学生に一般的な講義・ゼミとは違った形態の授業を受ける機会を提供することができたことや、オープンキャンパスにおいて学生が全面に出る機会を設けることで、来場している高校生や保護者により身近な形で大学・学部の魅力を伝えることができたことが大きな成果だと考えている。

5．反省と課題

本科目は開講初年度ということもあり、前期活動終了後に様々な反省点が浮かび上がってきた。以下では、活動時期に応じた反省と課題を述べていきたい。

(1) 活動前半（4月～5月）

この時期は、学生の本科目に対するイメージが確定していなかったこともあって学生の動きがそれほど積極的でなかったため、担当教員としてよりイニシアティブをとって学生を誘導すべきであったと考えている。特に、施策の決定やスケジュールの策定が不十分なグループもあったため、正課外の時間を使ってでもリーダーにアドバイスを与えたり意見交換をしたりしておけば、それらの改善が期待できたと思われる。

また、全体の趣旨（オープンキャンパスでの経済学部のPR）からかけ離れた施策の検討に向かいかけたり、予算的なバランスを考慮しない（もはや粗品とは言えない）粗品の購入を考えたりするグループも出てきたため、それらの把握と方向性の修正を早期に行う必要性に度々迫られた。これらに対しては、全体ビジョンをより明確に伝える機会を多くすべきであったと反省しているが、次年度以降は今年度の事例を示すことができるのでより状況は改善されると考えている。

(2) 活動後半（6月～7月）

この時期の大きな反省点としては、チラシ関係の準備の遅れである。チラシは、グループB～Fの各グループが配布を予定していたが、ほとんどがカラー両面印刷を計画し、また枚数も多かったため外注を行うこととした。リーダーには、あらかじめ原稿締切日を周知してはいたが、軒並み原稿提出が遅れ校正に十分な時間が取れない事態が生じた。また、著作権上問題が生じかねないような画像を使用するグループもあり、最終的にその画像の使用を取りやめたため、その相談にも時間をとられることとなった。さらに、学生によるチラシ配布であるため学内各部署に届出・了解を済ませておく必要があったのであるが、担当教員が失念していたこともあり、その対応が後手に回ってしまった。

これらの反省点は初年度特有のものと言えなくもないが、学内他部署や学外と関わる際に最低限必要となるマナー（特に締切を守ること）について、よりしっかりと自覚させておく必要があったと考えている。

(3) オープンキャンパス当日

当日の反省事項としてまず挙げられるのは、先にも述べたが当日の準備時間不足である。人数的に当日の準備で間に合うと考えていたが、遅刻者が予想以上に多くて指示が十分に行き渡らなかったため、準備に手間取る結果となってしまった。次年度以降は、前日に準備の時間をとるように改善するつもりである。

次の反省点としては、活動シミュレーションと学生の役割分担の徹底が不足していたこと、さらにはその結果好ましくない行動を行う学生が出てきたことである。グループ内での役割分担は完全にグループに任せていたのだが、当日の活動シミュレーションが不十分なグループでは各学生の役割の具体化ができておらず、手持無沙汰な学生が散見された。さらにこれらの学生が、テント後方の芝生広場や近隣のベンチに座ってくつろいでしまい、来場者の印象に悪提供を与えた可能性が高いことが懸念される。この問題点に対しては、グループ内の活動シミュレーションと役割分担の徹底を促すことも必要であるが、学生の休憩スペースを別に設けて手がすいた学生をそちらへ誘導することが望ましいと思われるので、今後改善していくこととしたい。



図4 当日の活動拠点となったテント

さらに、学内他部署の施策内容を学生が十分に理解していなかったことも、反省点に挙げられる。来場者から見ればどの教職員も学生も同じスタッフであるため、様々な質問を受ける機会があったようであるが、経済学部以外の事柄についてしっかりと答えられなかった学生もいたようである。また逆に、本施策のチラシに場所・時間等について不十分な記載しかなされていないも

のもあったため、学内他部署のスタッフに大きな迷惑をかけることになったようである。これらの点については、次年度以降特に改善が必要となると思われる。

これら以外の全般的な問題点としては、担当教員が1名であるのに対し、特に3限目クラスでは実質50人近くの動きを把握する必要があった点が挙げられる。ある程度はグループリーダーとのやり取りで対応していたが、それでも同時に5グループを指導・観察することは困難であったし、場所を変えてグループ活動を行う場合の活動状況把握にも時間をとられることがあった。そのため、今後は受講制限を行うことも考える必要があるかもしれない。また、使用教室が通常の講義室であったため、グループ活動や話し合いを行う際に多少不便であると学生から申出があったので、演習室・ゼミ室のようにグループ活動・話し合いが行いやすい教室を確保する必要があると考えている。



図5 グループ毎の話し合いの様子

その他学生からは、担当教員やリーダー（他のグループリーダーも含む）等との連絡・連携が機動的にとれなかった反省を踏まえ、インカム（トランシーバー）を教員・リーダーに持たせるという提言が出されたので、これも次年度には改善するつもりである。

6. おわりに

今期のアクティブ・ラーニングは、教員にとっても学生にとっても初めての取り組みであったため、試行錯誤の連続であった。担当教員の不手際も多く、履修学生、特にグループリーダーには迷惑をかけることもあったし、さらには学内各部署にも無理を頼むことも多かった。しかしながら特に活動後半の時期になってくると、グループリーダー・サブリーダーが上手にリーダーシップを取れるようになると共にメンバーも役割が明確化して積極的な動きができるようになり、(成果の有無は別としても)こちらが予想する以上に活発な活動を行うグループも出てくるなど、学生の成長ぶりに驚くことも多かった。

これらの成果に関しては、学内各部署、特に経済学部からいただいたサポートの恩恵によるところが大であり、ここに深く感謝の意を表したい。一方で、残された次年度以降に向けての課題は、担当教員に課せられた責務であり、更なる研鑽を積んでその改善に取り組みねばならないと覚悟しているところである。今後、経済学部におけるアクティブ・ラーニングがどのように学生の資質と学修の向上に資しているのかについては、また稿を改めて分析・報告することとしたい。

参考文献

- ・河合塾(2011)『アクティブラーニングでなぜ学生が成長するのか』, 東信堂
- ・河合塾(2013)『「深い学び」につながるアクティブラーニング』, 東信堂
- ・河合塾教育研究部(2013)『2012年度大学のアクティブラーニング調査報告書』, 河合塾
- ・文部科学省ホームページ(<http://www.mext.go.jp/>)